

通常の学級における特別な配慮等が必要な児童生徒支援研修会

7月27日（月）に、東部教育事務所より、坂本典子先生をお招きし、「通常の学級における特別な配慮等が必要な児童生徒支援研修会」を行いました。

様々な生徒への支援を考える際の視点について、大変示唆に富むお話を伺うことができましたので、共有させていただきます。

（Ⅰ）指導講話「通常の学級における特別な配慮等が必要な児童生徒の支援について」

① 生徒指導と特別支援教育の関連性

- ・生徒指導のねらい（自己指導能力の育成）と特別支援教育のねらい（可能性の伸長・自立）は、共に「自己肯定感を育む」という根幹で深く結びついている。
- ・特別な支援を要する児童生徒だけでなく、「すべての児童生徒が安心して力を発揮できる環境づくり」を通常の学級で進めることが重要である。

② 実態把握の重要性（「行動の背景」を見る）

- ・通常学級の8.8%（30人学級で2～3人）に学習・行動面で著しい困難を示す児童が存在する（令和4年文部科学省調査）。
- ・「立ち歩き」「暴言」などの見えている行動だけを叱るのではなく、「授業が難しくて分からない」「静かに聴き続けることが苦手」「失敗が怖い」といった背景にある困り感を捉える「丁寧な実態把握（いかなる行動にも必ず理由がある）」が不可欠である。

③ 教育のユニバーサルデザインと支援のアプローチ

障害のある子には「なくては困る支援」、すべての子供には「あると便利な支援」を以下3つの視点から構築する。

○教室環境：掲示物の整理、ICT機器の活用、使いやすい教具、適切な座席配置。

○授業の工夫：学習の流れや課題の視覚化・明示、自己選択・自己決定できる場面の設定、達成感を持てる振り返り。

○人的環境（最重要）：失敗しても大丈夫という「心理的安全性の確保」、共感的な人間関係、認め合い・褒め合う集団づくり。

④ 子供を捉える3つの「レンズ」

- ・「できない子」ではなく「できる条件がある子」（得意な場面・集中できる条件を探す）
- ・「困らせる子」ではなく「困っている子」（行動は助けてのサイン）
- ・「できない」ではなく「まだ、できない」（発達や成長のスピードに合わせてトレーニングする）

(2) 事例検討

- ・先生方に「通常の学級における特別な配慮等が必要な児童生徒」をそれぞれ1名思い浮かべていただき、赤の付箋に「当該児童生徒の特徴」を、青の付箋に「当該児童生徒に対して考えられる支援 or 当該児童生徒が不適切な行動をする要因」を書いてもらう。

→班で共有し、更に支援の手立てを考える。

→全体で共有。

○各班の発表から

児童生徒への支援を考える際に重要だと思われることとして、次の3つがあげられた。

① チーム対応とルールの統一

過剰な支援や指示の乱立を防ぐため、担任に窓口を一本化し、共通理解のもとで「時間の約束」などのルールを一貫して運用する。

② 行動の可視化と要因分析

トラブルや離席が起きる場所・課題・時間を書き出し、背景にある共通パターン（パニックや理解不足など）を把握する。

③ 居場所づくりと情報共有

別室対応での偏見を防ぐため、交流級や全体の中で良いところを意図的に褒めて認める。また、支援級・通級・管理職との密な連携（情報共有）を行う。

○指導講話

班での情報共有と全体発表を受けて、坂本先生から指導講話をいただいた。

① 環境調整による支援

「子供自身を変えよう」とするのではなく、周囲の環境や関わり方を整えて安心できる場所に導く役割が求められる。

② 組織的支援の推進

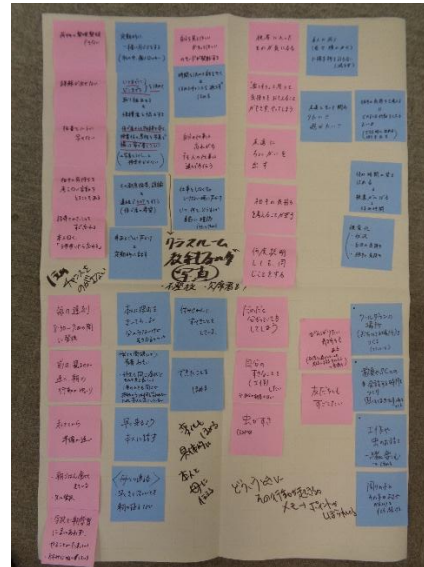
担任一人で抱え込まず、全校体制・他学年の教員と連携して知恵を出し合うことが最も効果的な支援に繋がる。

③ 資料の活用

富山県総合教育センター作成の「先生が気づき、できるチェックリスト」「特別支援教育の学びQ&A」等を活用し、始業に向けた準備と環境づくりを推進する。

6 当日の様子





7 参加者の感想（一部）

- ・どうしても配慮を要する児童に対して、言動に着目しがちですが背景や理由を考えた上で手立てを考えることが大事であることを再確認しました。また、教育のユニバーサルデザインが最近重要であることが言われ、特に人的環境を意識していかなければいけないと分かりました。本校では、クラス会議を行い、心理的安定性を図りたいと考えています。もちろんクラス会議だけでは足りませんが、一つの方法としてはよいと感じています。児童が自己肯定感を高め、自分の存在の価値を理解できることで、一層頑張れたり、先生との話も前向きに捉えたりできると思うので、2学期から子供のよさをもっと高めつつ、支援を考えていきたいと思いました。
- ・「教育のユニバーサルデザイン」という話が特に印象に残っています。全ての子供にとって「分かる・できる」授業を構築することができれば、同じ教室にいたる全ての子供が安心して活動することができることに繋がると強く思いました。どうしても特別な配慮がいる生徒ばかりに目が行きがちであったり、配慮を必要とする生徒への支援ばかりを考えがちになってしまったりすることがありますが、「誰にとっても」という視点を常に意識していきたいです。「どういう時にその行動が起こるのか」という実態把握も非常に大切だと感じました。問題行動を指導するだけではなく、どうしてその行動が起こるのかが分かっていくと、本人への適切な声掛けをしたり手立てを考えたりできると思いました。生徒との対話や先生方との連携も忘れずに、実態把握に努めていきたいです。
- ・私が今回の研修会で、特別な配慮等を必要とする児童への支援をする際には、その児童に対してだけではなく、全ての児童が安心して力を発揮することのできる環境づくりが重要であるということが特に心に残りました。児童自身が一番困っているのだということを忘れずに、児童が何に困っているのか、何を望んでいるのかをよく考えて、児童が安心して過ごすことのできる環境を作っていきたいと感じました。支援級の先生とも積極的に情報共有して、児童が安心して、楽しく学校生活を送ることができるようサポートしていきたいです。